

## バリエーションルート 奥穂高岳南陵について

奥穂高岳南陵は、穂高岳のバリエーションルートの一つである。バリエーションルート・ガイドを集大成したものに、[日本山岳大系「槍ヶ岳・穂高岳」](#)（白水社、1997年6月10日発行）という書籍がある。岳沢の項で紹介している7ルートの中の一つが南陵ルートだ。初登は1912年8月で、ウォルター・ウェストンと道案内の上条嘉門次により登られていて、その時のレポートは、[「日本アルプス再訪」](#)（平凡社、1996年9月11日）に詳しい。また最近では、岳人2013年1月号の「日本百名山第1回穂高岳」で、百名山の深みへ「岳人巖登頂選ルート」として、「南陵ルート」が服部文祥氏により紹介されている。当時、ウェストンは50歳、嘉門次は64歳で、今のような登山道がなかった時代に上高地から日帰りをしているのは驚かされる。また、ウェストンは次の年（1913年）に夫人同伴で同ルートを登っている。我々は、事前にルート情報を入手でき、近代的な登攀装備だったが、岳沢の野営場を4時10分に出発し、帰りは重太郎新道を下り17時30分に野営場に戻った。

話はそれだが、本稿では、この南陵ルートの紹介と、文献ガイドとウェストンのレポートを引用しながら私見を入れてみることにした。引用部分は青字は「日本山岳大系」、赤字は「ウェストンの記」である。



上高地の河童橋から見る岳沢と奥穂



南陵とトリコニー

「吊尾根の奥穂よりから岳沢に伸びる尾根で、中間部にある三つの岩峰トリコニーで有名な古典的ルートである。」

「われわれが大好きだった山をふたたび私を歓迎しようと、一週間前から待ち続けたと彼は言う。そして、かれわれとの再会を心から喜んでいるのを見るのは、じつに嬉しい。われわれはこの再開を祝うために、上高地から奥穂山塊の最高峰を新ルートから初登攀する計画を立てた。このルートはかつて

嘉門次が十七年ほど前にクマを追跡したときに一部をたどったことはあるが、その全ルートをとったことはない。」

写真の中央左が「三つの岩峰トリコニー」だ。この尾根を特徴付ける岩峰で、実際登ってみて面白かったところだ。「古典的ルート」といえるのは、ウェストンと嘉門次が1912年の登り、手記を残しているからだと思う。写真の中央の小ルンゼが取り付きで、左の谷が扇沢、右の谷が滝沢で降雨直後は大滝がかかっている。



扇沢雪溪



滝沢大滝

「岩も堅く、楽しいルートで人気がある」

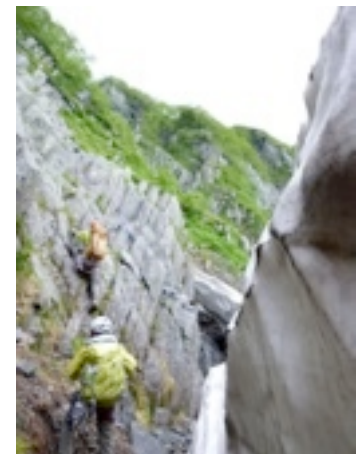
確かに人気ルートで、ネットで検索すると何件かのレポートがヒットする。最も詳しくしたのは、私のサイトのリンクにある、「山の手帳」さんのレポートだ。2回登攀しており、ウェストンの足跡を訪ねる意識した登攀が興味深い。といっても、南陵は一般登山道ではない。安全に登るためには登攀の技術が必要なのはもちろんだが、岩峰を一日歩けるだけの体力も必要だ。

「雪溪の状態によっては取り付くのに苦労する。」

「沢のモレーン上の河床の上部は、小山のように高まった、吹きさらしの長い雪溪に覆われている。これは、我々にとって喜ばしい救いであったが、それも最後は深さ9メートルほどのベルクシュルントに突き当たる。そこで、注意しながらピッケルとロープを使ってその中に降りていき、とうとう、先の岩場の安全地点に無事に達した。」

シュルンドが口を開いているので、簡単には岸壁に移れない。我々の登攀は7月中旬だったが、すでにシュルンドが口を開いていた。運良く一カ所だけ雪溪の末端が岩壁に接して移ることができ、雪溪の下に潜り込んで岩壁に取り付けたが、雪溪の崩壊などが考えられるのでリスクはある。

「ルンゼが終わると草付きの斜面となり、すぐにスラブに突き当たる。南陵で最も悪いところだが、ルートはいくつか選べる。」



雪溪の下から取り付く

「今や、我々がたどるルートは、とてつもなく急峻な岩のバットレスであり、それからの二時間は、非常に厳しい登攀であった。穂高のこのフェースは、日本アルプス全体の中で最も長い、連続の登攀を強いられる。困難さの点で、ヨーロッパ・アルプスの数多くのすばらしい登攀と同格である。嘉門次は目覚ましい軽快な動きで前進した。清蔵と同じように、その足指と硬いしわのよった手指を使って、登っていった。濡れてぬるぬるした岩壁は、彼の柔らかいわらじを履いて、その安定した足場を確保する必要があった。」



スラブ帯

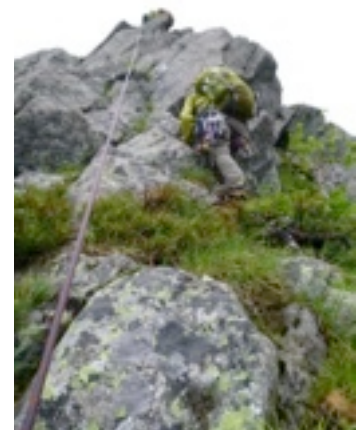
その通りである。草付きの斜面には、ミヤマクロユリ、シノキンバイ、ハクサンイチゲが咲き乱れていた。傾斜がきつく、滑ると危険なので、アンザイレンで登り、スラブの手前で小休止した。ずるずるの斜面はいやなものだったが、問題はここから先。スラブは濡れているのでこの日は問題外だった。いろいろとルートがあるようで我々は、左からやってみたがハイマツに捕まり引き返し、右から攻めてみた。ハイマツ帯だが、少し溝になったところは歩きやすく、ダケカンバに捕まりながら右へ進み、尾根の芯に乗った。岩場になって2ピッチロープを出し

た。この先のトリコニーよりも、ここの方がこのルートの核心だと思えた。

「一般には30mの凹角を登り、浅いルンゼに入り、さらに7mほどのチムニーを抜けてトリコニーの下のハイマツ帯に出ているようである。」

30mの凹角はガスのための確認できなかった。しかし、「トリコニーの下のハイマツ帯に出ている」とあるが、我々は先ほどの岩場を抜けてハイマツ帯に出た。ハイマツ帯は踏み跡をたどれば難なくかわせた。

「トリコニーは最初の岩峰を滝沢側から巻き、あとは岩稜通しに登る。さらにナイフ・エッジが出てくるが問題はなく、左に折れて広くなった尾根を適当に登れば吊り尾根に出る。」



スラブ帯右側の岩場





トリコニーI峰



ナイフリッジ



トリコニーII峰

トリコニーはほとんど確保なしで登れた。その先に1カ所ギャップがあり、懸垂で下降した。「左に折れて広くなった尾根を適当に登れば吊り尾根に出る。」と簡単に書かれているが、トリコニー2峰から吊り尾根まで2時間を要した。

「頂上には、11時40分に着いた。下降は4時間半かかったが、登るとき以上に苦しいものであった。渦巻く霧の中で、最初の600mばかりは、ルートを見付けるのが困難なことが多く、わらじと靴はくしゃくしゃのみすぼらしい状態になってしまった。」

